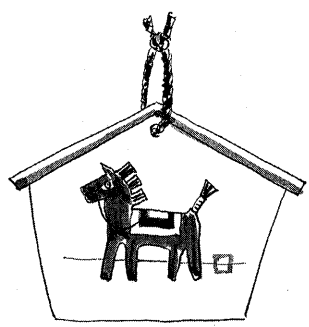


# 思い出の紙芝居

松井とし



幼稚園はなくなってしまったが、目を閉じればいつでも、こじんまりとした園舎の隅ずみまで思い浮かべることができる。遊戯室と保育室の間の廊下の突き当たりには、紙芝居をいれる戸棚があった。時代と共に子どもたちとの生活も変わり、最後の頃には紙芝居を見せるという機会はめったになくなっていったが、それでもブランコの後ろの花壇に萩の花が垂れるように咲き、すずきが秋風にゆれる頃になると、どうしても戸棚から出してきたくなる紙芝居があっ

た。柔らかな感じの絵と語り口がとてもよくマッチしたこの紙芝居は『少年と子だぬき』というものだった。

【町へ遊びに行きたいと子だぬきにせがまれて、母だぬきは萩の花とすずきを使って術をかける。かわいい女の子に変身した子だぬきの、たくてかわいいしっぽをスカートの下に隠してやりながら、母親は「しっぽを隠しておくこと。くしゃみをするとき姿が元に戻ってしまうこ

と」を言い聞かせ心配しながら送り出す。子だぬきは喜んで山道をかけ下りて町へ行く途中、自転車に乗っていて転んで足に怪我をした少年と出会う。母親の注意も忘れ、柔らかなしっぽ

に川の水をつけてきては傷の手当をしてくれるやさしい女の子が、たぬきだと気づきながらも少年は、その優しさにふれ心豊かなひと時を過ごした。夕方になり自転車の後ろに乗って山の家へ送ってもらう途中、風が冷たくなって女の子は思わずくしゃみをしてしまう。(後略)】

※『少年と子だぬき』ポプラ社より引用

「風をききって走る自転車の後ろに乗っているのは、頭に萩の花をさしたかわい子だぬきでした」という結末の情景が何ともほほえましくて、子どもたちの顔もなごんだものだった。私はといえはいつも、変幻自在の表面的なもの

と、内なる変わらぬものについて考えさせられていた。この紙芝居の原作者が、児童文学作家の佐々木たづさんだということに気が付いたのは何年か経ってからのことだった。

とても懐かしい人に再会した思いであった。

彼女は高校生の時緑内障を患い失明され、当時日本では珍しかった盲導犬と出会うために、イギリスへ渡って訓練を受けられた方である。その体験と盲導犬ロボータとの生活を著した彼女のエッセー『ロボータさあ歩きましょう』は話題となった本で、高校一年生だった私も感動して読んだのだった。

愛するロボータのために住み慣れた東京を離れ、環境のよい山中湖畔に移られたことを新聞紙上で知ってから、もうずいぶん時が過ぎ去った。佐々木たづさんは今、どうしておられるだろうか。

(元・幼稚園教諭)